

“VS34”で上庄里芋の残渣処理(福井県大野市)

ブランドサトイモの産地、福井県大野市で VS34 によるサトイモ親株の分解処理試験を行いました。翌年の水稻栽培で、ガス発生が与える影響を問題視しての試験でしたが、好結果を得ることが出来ました。ヒエ多発田の試験結果も大変興味深いものでした。

残渣を確実に処理する事こそ、土作りのはじめの一步です。

福井県大野市は“上庄(かみしょう)里芋”というブランドサトイモの産地。食用にしないこのサトイモの親株は、収穫後に田んぼに大量に捨てられる為に、翌年の水稻栽培期間中に有害ガスを発生し、収量低下などの原因となっていました。

行われた VS34 による残渣処理試験は、田んぼの秋起しの時に VS34 を散布(2袋/10a)し、耕起して、春までに微生物のパワーで確実にサトイモ親株を分解することで、翌年の水稻にガス害を起こさない事が可能か、という試験内容でした。

まず本題のサトイモの親株。こぶし程の大きさもある塊が、ワラや稲株と同じ様に簡単に分解されるかどうかとの懸念もあったようですが、農家、農協指導員ともに効果を感じてもらえる結果が得られ、報告書の考察の欄には『表面に見えるサトイモ親株の量が散布区では皆無であった』とのコメントを頂く事が出来ました。

そして、大豆残渣。これは枝も太く固く、殻の部分も大切な種子を守る頑丈な部分ですが、こちらも『散布区での大豆株の腐りは顕著であった』と、結果は良好。

また、ヒエ種子の分解を期待してのヒエ多発田での試験。こちらは“ヒエの種子が分解されればヒエが減る？”という淡い期待と切実な祈りを込めた試験(詳細は弊社へお問い合わせ下さい)でしたが、『翌年の水稻栽培では劇的にヒエが減った』とのコメントを頂く程の好結果。

バーミキュライトが軽い為に、『風邪の強い日には撒きにくい』というご指摘は頂いたものの、残渣の分解処理能力には満足して頂けたようです。また、石灰窒素を散布するわけにいかない特栽米や有機栽培の圃場のワラ鋤き込みに使える事も利点です。

同JA管内で以前から VS34 を残渣処理にご利用頂いてきた農家さんによれば『地温の事を考えると10月20日頃までに撒いておくともっと良い』とアドバイスを頂きましたが、11月下旬の散布でも効果を感じてもらうには十分だった様です。

残渣処理には手間やお金をかけたくないのが心情ですが、これを土中堆肥作り・土作りとイコールと考えれば、ここを確実にやっておくかどうかは翌年の作柄に大きく関わってくるはずです。



風の無い日を選び、親株が散乱する圃場に動力散布機やプロキャスでVS34を散布し、その後、トラクターで耕起する。